社説

國力增進の一大原因

近年來國力增進の實は自から數字の上に徵す可きもの少なからざれども我輩の所見を以てすれば今の世人の餘り注目せざる處に更らに增進の一大原因として認む可きものなきに非ず抑も廢藩置縣の一事は非常の大變動にして單に政治上の改革と見る可らず或は時の政府の當局者には深き考もなく政權統一の一點よりして決斷したるみとならんなれども實際は日本社會に於ける富の分配法を一變したるものにして影響する所自から大ならざるを得ず只その結果の眼前に現はれざりしのみ廢藩後の有樣を如何と云ふに士族の家は世祿を止められたる其代りに公債證書を得て種々の小商賣など始めたるもの多けれども所謂士族の商法にして孰れも失敗せざるはなし損するものあれば自から利するものあり商賣の常にして其失敗は國の資本の消滅したるに非ず事の全面より大觀すれば敢て驚くに足らずと雖も現に角に目前の樣子を見れば何百年來社會の上流に位して勢力を占めたる士族の家は零落流離して見る影もなきに至りしと同時に其士族を得意にしたる舊藩城下の小商賣人輩も之が爲めに影響を蒙りて不景氣を喞つ其一方に農民の輩は兎角新政を喜ばず地租改正の如きよく〳〵其次第を詳にすれば自家に利益の處置なるにも拘はらず單に御年貢の改正と聞て負擔を增さるゝものと思ひ込み竹槍蓆旗の騷動さへ演じたる程の始末にして滿目の風光甚だ面白からず國內の人心索然として恰も有るものを失くしたるの思を爲さしめたり正しく廢藩後の有樣にして一見或は國力衰弱の徵候を現はしたるが如くなりしかども本來廢藩の決斷は疑もなく日本社會に滋養健康の藥劑を投じたるものなり從來飽暖安逸に身を持ちて五體肥滿の一種の病人に大食を禁じて細々の滋養分を給すると同時に身體の運動を促したるみとにして健康の法として申分はなけれども久しく飽暖に安んじたるものが養生の法を命ぜられて遽に生活の方法を一變すれば一時身體の衰弱は免かる可らず即ち廢藩後の容體にして前記の如き徵候を呈したる次第なれども滋養健康の効能は早晩實際に現はれざるを得ず自然の數にして我輩の所見を以てすれば廢藩置縣の結果は近年に至り漸く事實に認められて其效能果して空しからざるものあり現に九州地方の或る舊藩地の如き廢藩後一時の成行は他の一般の例に漏れず憐れむ可き有樣にして士族と云へば殆んど顧みるものなき程の次第なりしに今日は然らず商賣工業を營み頭角嶄然地方に傑出するもの孰れも舊士族にして町人百姓は依然たるの素町人土百姓の輩多き中に士族のみ獨ります〳〵進步の色ありと云ふ風に各藩地共に同樣の例を見ること多かる可し本來士族の輩が遽に廢藩置縣の變に遭ひ不慣れなる士族の商法などに從事して失敗したる其趣は恰も劍客が充分の腕前はありながら遽に[illegible]に接して敗を取りしに異ならず腕の鈍きに[illegible]の違ひたるが爲めのみ日本の士族は三百年來[illegible]に精神を[illegible]ものにして其精神の[illegible]から[illegible]の[illegible]時代には全力を政治上[illegible]まで[illegible]かりしなれども一旦時勢の變化に際して次第に心得を轉じ加ふるに文明新知識の力を以てして他に向ふときは商賣實業孰れの方面に於ても勢力を逞うせざるを得ず年來素養の然らしむる所、決して偶然に非ざるなり故岩崎彌太郎氏は始めて學者士流の輩を商賣上に用ひたる人にして其實話に曰く丁稚上りの奉公人は十露盤なども巧にして一寸客に接するにも愛嬌あり使ふに便利なれども動もすれば帳面を胡麻化し持逃げなどするもの多くして何分にも信用するを得ず之に反して士流の輩は無骨にして腰を屈するに慣く却て客を怒らしむるなどの缺點あれども第一に金錢を取扱はしむるに大丈夫にして一點の不安心なく又掛合向きの事に當らしむるときは此方の思ふ通りに事を決して無益の世話を要せず無學なる素町人の到底及ぶ所に非ず士族の無骨は之を改めて商賣風に化せしむること易しと雖も奉公人根性は如何にしても治療の法ある可らず商賣上に双方の得失は余が斷じて疑はざる所なりとて二十何年前よりして早く士流の輩を用ふるの端を開きたるは畢竟氏の先見にして三菱會社の成敗自から偶然ならざるを見る可し近來諸方の銀行會社などにても往々學者士流の輩を用ふるもの少なからず其成績を聞くに孰れも可ならざるなしと云ふ當然の譯にして[illegible]の士流は年來鍛ひに鍛ひたる素養に加ふるに新智識の力を以てして既に心構を一變して恰も新社會の新事物に適應するの腕前を成したるみとなれば其働きは大に商賣實業の上に現はれざるを得ず我輩は近來の有樣に徵していよ〳〵事の眞實なるを認むるものなり抑も封建の時代を顧みれば四十萬戶の士族は孰れも常祿を食み他の人民の勢力に生活したるものにして當時の社會は恰も士族と名くる一種の遊民を養ふたるのみならず實際に其遊民輩は士族の特權を有して寧ろ商賣實業の妨を爲したるみと多かりしに反して今は其四十萬の士族及び其何百萬の子弟は自辨自活の道を得たる其上に學問智識の力をば一向に商賣實業の方面に轉じて恰も國中最上等の智力を擧げて國富の發達進步を謀るに餘念なしと云ふ國力增進せざらんと欲するも得べからざるなり是れぞ即ち廢藩置縣の結果にして當時の滋養健康劑、近來に至りて始めて其効能を現はしたるものと云ふ可し我輩が國力增進の一大原因と認めて倘は今後に望を屬する所のものなり

○軍事公債臨時發行（第二十三回）

去る二十八年十月三日勅令第三十七號及び同月四日大藏省令第三號に據り二十七八年役に關係せる軍人軍屬の一時賜金に代用する爲め軍事公債額面千萬圓を限り臨時發行する事となり既に發行せる高は額面八百三十二萬七千五百圓に上りたるが一昨七日額面百圓に付き九十三圓四十八錢にて四萬五千圓發行せり當初よりの發行額及び實收額は左表の如し

回	發行額面 圓	實收額 圓
自第一回至第二十二回	八、三二七、五〇〇	八二六六、一六四、五〇〇
第二十三回	四五、〇〇〇	四二、〇六六、〇〇〇
[illegible]	八、三七二、五〇〇	八、三〇八、二三〇、〇〇〇

○農商務省と小官林

農商務省の管理する小官林は[illegible]の經費を要する割合に收益甚だ少なく而して又其森林の一部分は村落の間に散在するが故に人民と屢々悶着を釀し[illegible]常に困難を感じたりしを以て大隈伯大臣たりし時情況調査の上小官林は成る可く拂下ぐる事に決定し二三の地方に官吏を派遣したりしも拂下を實行するに至らずして大隈伯辭職し引續て松方內閣も瓦解したる爲め其儘となりしが伊東農商務大臣となり渡邊氏山林局長となりて未だ幾日ならざるに宮內省は曩に山林局より讓受けたる山林の內百町步未滿のものを農商務省へは一言の挨拶なく拂下ぐる旨告示したるを以て地方に依りては多年小官林の拂下を希望したるものを刺激し又々動搖するならんか渡邊山林局長は大隈伯訓示の方針と同意見の由なれども今日まで省議を決定するに至らず若し大隈伯の方針通り決するも經費多端の折なれば調査に取掛る能はざるを以て他日議會の協贊を經て充分の經費を得たる後ならでは實行し難かる可しと云ふ

○敍任辭令

任陸軍步兵大尉	陸軍步兵中尉	青木　敬行
同	同	田中　欽藏
同	同	山本　正郎
任陸軍輜重兵少尉	陸軍步兵少尉	相澤　正
同	同	北條　榮藏
同	同	寺田　武
同	同	中野　駿一
任岩手縣一關尋常中學校長		渡邊　[illegible]
補官幣大社平安神宮宮司	從三位伯爵	冷泉　爲紀
補官幣中社金鑽神社宮司	國幣中社二荒山神社宮司	金鑽　實守
兼補國幣中社二荒山神社宮司（以上二月七日）	別格官幣社日光東照宮宮司	中山　信徵

○東京市會

今九日午後四時より東京府廳內議事堂に於て東京市會を開く筈なり

○內地臺灣間汽船航海數

臺灣と內地間及び臺灣沿岸の交通機關は如何に成り居るや往々之を知らざるものあり今左に摘記して讀者の便に供す

一內地臺灣間航海	毎月	十回
一臺灣沿岸其他航海	同	七回

內

日本郵船株式會社汽船（補助金五萬貳千貳百五拾圓）

一直航船（神戶、門司、基隆）	毎月	二回

大阪商船株式會社汽船（補助金四拾六萬貳千貳百五拾圓）

一直航船（神戶、宇品、門司、長崎、基隆）	毎月	四回
一沖繩經過船（神戶、門司、三角、沖繩、基隆）	同	二回
一同（神戶、鹿兒島、名瀨、沖繩、基隆）	同	一回
一同（神戶、鹿兒島、沖繩、八重山、基隆）	同	一回
一西廻沿岸線（基隆、澎湖島、安平、打狗、車城、南寮、卑南、花蓮港、蘇澳、基隆）	同	二回
一東廻沿岸線（基隆、蘇澳、花蓮港、卑南、南寮、車城、打狗、安平、澎湖島、基隆）	同	二回
一基隆打狗線（基隆、澎湖島、安平、打狗）	同	二回
一基隆淡[illegible]宜蘭線（基隆、淡水、大[illegible]、宜蘭）	同	一回

○犯罪の美術（十八）

臨峰譯

釦を得てより、伴は忽ち洛陽館を去り、神田ホテルに急ぐに、神田ホテルには、疾くより五百藏のありて、今日は未だ笑村の出で來らずと云ふ。曩に置手紙を見し時には、五百藏の暫時笑村の行衞を失ひたるを、太く不滿に思ひ、伴は甚しく之を怒り居たれば、其時にして五百藏の、若し伴に出會ひたらんには、忽ち百雷の落し掛かるが如き、劍突を喰はされたるべきも、彼の釦の得られたるより、伴はすつかり上機嫌になりて昨日は御苦勞でありしなど、餘計の愛想に五百藏を嬉しがらせ、笑村めが汽車のなかで、あんな利いた風な事を云ひながら、何よりも屈强の手掛を殘して置くとは、畢竟口だけの大法螺、矢張り普通の素人罪人に過ぎざりし、今に此釦でギユーと云はせ、無理にも探偵の腕前に、感心させでは置くべきかと、大意氣ごみの大勇み。

然れども左る

一通りの訪問客

笑村氏に面談を

程もなくして、

延き行かれたる

り心地やはらか

なぞ〳〵、配置よ

暖爐を燒き出し

錦襴にて、態と

の棚には、赤銅

を排べ、壁には

厚サ六七寸もあ

揃へて置きたり

とてみちたく賑

上げらる。是が

誰ありてか信ず

斯ばかりの紳士

より深き事情の

の如き事情の原

り。左れども此

の死[illegible]と知れるも

りを見ますに、

『伴君、失敗だが

はうて。』

『ハイ』と答へて

は寢室にして、

り。笑村は白絹

其髭を剃り居た

『是は飛んだとあ

らうつひ何時でも

『ナニ宜いのです

な失敗だ。併し